創学舎ニュース
Sougakusha News
No.471

「私」の勉強術　その十四
～『 One notebook 』～

宿題のノートチェックをしていると、以前よりノートの使い方や字がうまくなっている生徒に気づく。彼らの成長が見てとれることは本当に喜ばしいことだ。そうしてノートのことを考えると、予備校で同じクラスだった、ある友人のことを思い出す。名前は直人、あだ名は「ノート君」。（本人の承諾も得ているが名前だけに留める。）彼はいつも授業に遅れて、やってくる。そうして周りの友人からノートを借りまくる。「遅刻せずに来ればいいのに……。」なんて思いながら、私もノートを貸したことがある。

ある時私が体調不良で授業を休んだら、珍しく彼が「いつもノートを借りているから、今日は俺が貸すよ。」と声をかけてきた。「サンキュ。」こんな会話の後、私は彼のノートを見て驚愕した。凄いノートに出会った。いや、ノートなのか？　そこにはあらゆることが書き尽くしてあった。「お前のこれ、すごいな。」咄嗟にそんな言葉が口に出た。彼が言うにはノートは本棚と同じで、順番や位置がある。また、余白を多く取り、その部分に後から知り得た重要な用語や解説を書き留めておく。記憶に定着したら、その部分は破り捨てる。彼のノートを見るまではあまり気にしていなかったが、「ノートの取り扱いって凄く大事なことだ」と改めて、感じた。この時に彼から聞いたことも含めてノートについて少しお話ししたい。

ノート作りは学年や目的に応じて変える必要がある。小学生では黒板の文字や図を、正確にある程度の速さで書き留めていくことに集中する。中学生になると、ノートを分けて使う。例えば授業用ノートや演習用ノートと、皆さんも用途に応じて分けて使っているはずだ。ノートの提出義務がテスト前にあるので、まだ板書を写すことが中心である。しかし、先生が話したことで重要なフレーズや用語はメモをするようになる。高校生では板書内容を自分なりにまとめたり、意見や疑問を加えたり、重要事項を強調したりしてカスタマイズする。また、テストや模試で活用できるように工夫する。

ノートには掟がある。中でも「勉強ノート」で一番大切なことはノート作りを目的にしてはいけないということである。「え、言っていることがわかりません。」と言われそうだが、ノートはあくまで勉強する上でのツールにすぎない。理解すること、覚えることが最優先事項である。

よくカラーペンや蛍光マーカーを多用した見栄えのするノート作りに熱中する生徒がいるが、時間の無駄であり、勉強した気分に浸るだけでまったく意味はない。それならば、教科書や参考書に書き込みをしてノート化する方がましだ。

また、授業で先生が話しているときには、話に集中するべきである。ノートを取りながら話を聞いていると、理解や記憶の妨げになる。これは、多くの人が共感できることであり、創学舎でもずっと言い続けていることである。

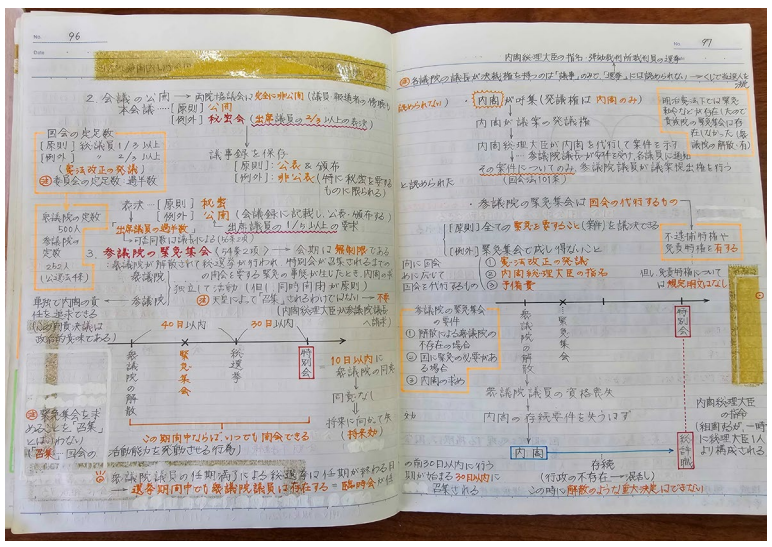
逆に、推奨したいのは、後で見返したくなるノート、いわば自分専用の参考書や教科書になるノートだ。そのためには、自分自身が何度も見返すような工夫をすることが必要だ。私が彼から学んだのはこの部分が最も大きい。一例を挙げると、私はクイズ形式で自分の苦手部分をノートの中に書き込んでいた。

他にも、このようなことに注意しよう。

- 余白を多くとる➡後から知り得た情報や重要なことを書き足す。
- ノートはマス目のノートを使う➡書きやすさや見やすさが格段に上がる。
- 勉強ができる人のノートを借りる➡得意とする科目のある人は何らかの工夫や努力をしている。それらをノートを通して、観察しよう。
- ノートしたことを友達と言い合う(教え合う)➡自分の部屋で音読してみるのもいい。耳に入ることで、記憶はより鮮明になる。
- 一冊に集約する➡あちこち散らばったのを見る時間を節約して、暗記や理解に集中する。

実は直人がノートを借りるのには理由があった。中学生の時に父親を病気で亡くしているので、大学受験及び学費のためにアルバイトをしていたのだ。そのために、いつも遅刻してくると後から聞いた。「そういう大切なことは、初めから言えよ。」と言ったら、「ノートを借りる人物は科目によって分けているし、授業内容のことを聞くから、友人と話すきっかけにもなって、ちょうどいい。」とのこと。『結構、抜け目のない奴だな。』と私は思った。彼とは今でも付き合いがあり、出版社に勤めている。ちなみに本人曰く、私のノートは英語・数学・政治経済・古文がわかりやすいらしい。逆に理科のノートは絶対に借りたくないという。なぜなら、私が理科を苦手としているので、ノートがつまらないらしい。他人に言われると結構、痛くて、切ない。

今回の創学舎ニュースの原稿を書くにあたって、実家に戻り、自分の学生時代のノートを見てみた。『う～む、今、創学舎に通っている生徒の方が上だな。』なんて思いながら、偉そうにノートについて語ってしまったと後悔する今日この頃である。



（松尾）

「私」の勉強術　番外編

今回の原稿依頼は、「勉強のやり方」ということですが、私は恥ずかしいことに学生時代本当に勉強から逃げていたので、違う角度から「学び」についてお話ししたいと思います。

私は小学四年生で、それまでやっていた習い事を全てやめて、中学受験の塾へ入りました。地元の公立中学から大学受験を見据えた高校に娘は入れないだろうという予測から、私立受験をすすめられたわけです。小四の本人はよくわかっていませんから、「やる！」といって簡単に塾へ入ってし

まうわけですね。ただ勉強が嫌いですから、その後は困難を極めました。幾度も三者面談が行われ、「続けるのか？　辞めるのか？」論争が家でも繰り広げられるわけです。そのたび「やる！」とこれもまたよく考えずに答えるわけなのです。本当に恥ずかしい馬鹿な過去です。そうやってなんとか私立中学にひっかかり、その後も個別指導塾へ通いながら高校へ内部進学し、高三の夏からやっと予備校に入りました。こんな私が学んだことは「勉強から逃げても必ずやらねばならない状況になる」、そして「勉強するには時期がある」ということです。

「いつでも学びなおせる」なんてフレーズを聞くことがありますが、よく考えてみてください。高校や大学へ行く時期を何年もずらせますか？「あとで勉強すればいいや」で取り返しのつかないこともありますよね。今、多くの科目を学んでいるのもその単元が将来役に立つ云々ではなくて、多くの科目を学習するなかで自分のアンテナにひっかかるものを探すために勉強しているのです。やってみないとその分野の面白さはわかりません。だから逃げずに一旦立ち止まって嫌なものと向き合ってみてください。一人で向き合えない人は、ぜひ創学舎の講師に相談してほしい。私は創学舎に入社して、「生徒としっかり向き合う講師の姿」「定期テスト勉強チェック表」この二つに感動しました。私が学生だった時に創学舎に入っていたらもう少し違った学生時代（勉強面）だったのではないかと悔やまれます。

自分がこのようだったので、生徒には後悔してほしくありません。だからいつも全力で授業をしています。口うるさく色々言います。周りの大人のアドバイスは素直に聞いてやってみることも大切です。特にお家の方は、心底皆さんの心配をして色々口うるさく言います。それは愛情です。ものすごい愛情です。いつか皆さんも理解して、感謝を伝えてほしいと思います。とにかく逃げずにやってみてください。勇気が出ない人は相談してください。お待ちしています。

（関野）

学生時代に学んだこと
～図書館情報学～

私は専攻とは別に、大学で中学・高校の教員免許、学芸員、司書、司書教諭、社会教育主事の資格を取りました。今回は、広い分野の学生に参考になると思われる司書科目、図書館情報学についてお話ししたいと思います。

用意された教科書を覚えればいいという高校までの勉強とは異なり、大学では様々な文献を読み比べ、自分の考察をまとめてレポートを作成したり、ゼミで発表したりという学習スタイルに変わります。そこでまず必要となるのは、課題に適した文献を探すスキルです。大前提として、大学でレポートを書く際は、一般向けの本ではなく専門書や学術書を選ばなくてはいけません。そのため、ぜひ利用したいのが大学図書館です。

大学の図書館は、中学・高校の図書室とは別世界です。市や県の図書館の何倍もの規模を誇り、二〇〇万冊を超える蔵書も珍しくありません。巨大な壁のような専門書群の中から、何を基準に本を選ぶか、簡単なアドバイスをしておきましょう。

図書館の本は「日本十進分類法」という基準によって、ラベリングされ、それぞれの書架に置かれます。たとえば自然科学は４，それがさらに４３の化学、４４の天文学というように分岐します。この分類による配置を参考に、お目当ての書棚に着いたら、本の巻末にある奥付の書誌情報を確認しましょう。書誌情報というのは、本を特定するための、書名・著者名・出版社名などです。

① 出版元　商業的出版物と異なり、学術書は大学出版局や専門の出版社から刊行されるものが大半です。専攻の専門出版社は覚えましょう。

② 著者の資格　経歴や所属団体（大学・研究所・博物館など）で、何の専門家かを確認します。

③ 発行年　近年のものを選びます。研究は日進月歩。最新の研究成果を反映させましょう。

④ 版次　版や刷を重ねているのは、ロングセラーの証。その分野の基本書といえるので、出版年が古くても読む価値ありです。

また、巻末に「参考文献一覧」がある本を選びましょう。一覧を辿れば、次々関連書が探せます。

このように図書館情報学の初歩を知ると、文献探しは容易になりますが、よりディープな科目に「レファレンス演習」があります。レファレンスとは図書館の受付で利用者の質問に応え、適切な文献を回答するサービスです。たとえば、「自由の女神の台座に彫られているのは誰のどんな詩か知りたい」「旧約聖書・新約聖書には『悪霊』という言葉が何回使われているか」といった質問に何という本（複数文献）の何ページに書いてあると、短時間で回答します。実際大学図書館を使って一時間以内に何題の質問に回答できるかという競争を繰り返したおかげで、私たちはたいていの質問にはびくつかなくなりました。このように図書館情報学は、どんな分野に進んでも役に立つ、学ぶ価値のある科目です。

（片岡）

新中１準備講座　３月スタートコース開講！

～数学と英語の中学内容先取り授業です～

最近の英語教科書は新課程前に比べると単語数が大幅に増加、表現も難化しています。それに応じて、１年生の１学期の最初の定期テストでいきなり難度の高い多様な問題が出題され、以前のような高得点は取りにくくなっています。そこで、創学舎では中学準備講座を早めに１月からスタートして、じっくり３か月かけて、習熟するよう学習を進めております。

今回、習い事やクラブ、中学受験などの関係で、これから準備を始めようというお子様のための、３月スタートのコースを開講いたします。

まずはお電話で各教室にお問い合わせください。

現小学６年生対象「割合」補習講座　３月実施

45 分×２コマ　受講料：1,100 円（教材費込み）

「割合」単元は、抽象的な概念把握が必要となるため、算数の単元の中でも最もつまずくことが多いところです。

しかし、中学校では、正負の計算の学習後すぐに「文字式」「方程式」で必要になります。また、「割合」が苦手のままでは、物理の「圧力」、化学の「定比例の法則」、地学の「湿度」など、理科の計算でも苦労することになります。

本講座では、小学校の「割合」に苦手意識がある現小６生を対象に、割合とは何かというところから様々な問題演習まで行います。詳細は、各教室の別紙講座案内をご覧ください。